

あぐり^だdeなんたん

南丹農業改良普及センターだより

Topics

平成29年2月

第19号

特集1 いざ、新たな領域へ！
京都丹波の挑戦者たち P2~3

特集2 次世代へ技術伝承
～「黒大豆塾」の取組～ P4

- 次世代を担う新規就農者の紹介 P5
- Topics P6
 - 話題の技術～アザミウマを寄せ付けない赤いネット～
 - 「援農隊」が農家をサポート！
- 京都丹波就農サポート講座 平成29年度受講生募集中!! P6
- 有機農業の取組を支援 P7
- 表彰 P7
 - 農の匠
 - 京都府農地・水・環境保全向上対策協議会優良組織表彰
- 退任・認定された農業士の皆さん P7
- 地元の小麦と小豆で京ブランドのパン作り P8
- 京の農林女子ネットワーク会議 P8
～まだまだメンバー大募集！～
- New Face! P8
- 農家の一言から P8

いざ、新たな領域へ！



水耕栽培のミニセロリ

曾我部町の藤田清美さんは、ハウスと露地でコマツナ、ホウレンソウ、ネギ、キュウリなどの野菜を栽培するほか、ハウス1棟でミツバの水耕栽培を行っています。野菜は地元スーパーのインショップ等で販売するほか、ミツバは料理店にも出荷しています。

藤田さんはさらなる規模拡大のため、平成27年の春に水耕栽培ハウスをもう1棟増設し、ミニセロリを導入することにしました。

しかし、ミニセロリは京都府内で栽培実績がほとんどないことから、今回「小さな経営革新チャレンジ支援事業」を利用して、普及センターの伴走支援のもと、ミニセロリの夏作、秋作、冬作の実証試験を行い、栽培技術を確立することができました。

インショップの評価も好評で、定期的な取引に発展しました。

藤田さんは「本事業に取り組んだことで、新品目の出荷が可能になり、販売額が増加し、経営の助けとなった」と喜んでおられました。今後、地域の担い手としてさらなる経営発展が期待されます。



亀岡市 藤田清美さん

ミニセロリにチャレンジ

京都丹波の挑戦者たち



南丹地域では、新規就農者や特色ある経営にチャレンジする農業者、6次産業化など経営の多角化に取り組み農業者を伴走支援するため、「京都丹波農業応援隊」

を結成しました。管内の市町、商工会議所・商工会の経営支援員やJA京都の営農指導員、農地中間管理機構の現地駐在員、普及センターをはじめとする南丹広域振興局等の関係者・関係機関が連携して、活動をしています。

今回は、その活動の中で「小さな経営革新チャレンジ支援事業」を活用し、新たな取組に挑戦した方々を紹介します。



都会の方に、田舎ならではの体験を

京都縦貫道の「京丹波みずほIC」近く、のどかな田園風景が広がる妙楽寺に古民家を改修した農家民宿「京の出合」があります。

開業準備に「小さな経営革新チャレンジ支援事業」を利用し、四季折々の農業体験メニューなどを紹介するチラシを作り、道の駅でのPRに活用されています。

代表者の城崎さんは「都会の方々に農業・農村への関心を持ってほしい」との思いから、京阪神の



城崎夫妻（左2人）と若手農業者（右3人）

大学生や家族連れなどが農業体験できる農家民宿を目指しておられ、現在、月1回、野菜の種まきや収穫、穫れたて野菜を使った調理体験を通して、旬の野菜のおいしさを伝えていきます。参加者は、「子供がのびのびと遊べる」、「田舎のゆっくりとした時間の流れを感じられる」と語り、回を重ねるうちに、リピーターになる方も出ています。

「都会に住む若い人たちが話ができ良い刺激になる」と城崎さん。最近では地域の若手農業者（写真右から3名の方）も加わり、「農家民宿をきっかけに若者の交流の場になれば、地域の活性化につながるのではないかと期待されています。」



今回作ったチラシ

持続可能なハウス栽培を目指して

南丹市八木町神吉地域

南丹市八木町神吉地域では、20年以上前からみず菜の施設栽培が始まり、現在では約20名が170棟以上のパイプハウスでみず菜を生産しています。しかし、長年にわたる作付けにより、塩類集積など土壌に問題を抱えるようになりました。

そこで、地域ぐるみで土壌の問題解決を図るため、神吉生産組合は、同じみず菜施設栽培の土壌問題解決に取り組みJA京都野菜部会峰山支部を視察しました。



視察研修で土壌の問題解決のポイントを学び、良質堆肥の共同購入先を確保したほか、下層土の物理性改善のためにサブソイラーの実演会を実施し、その効果を地域の農家に浸透させていきました。その結果、地域で良質堆肥の利用が進むとともに、サブソイラーを購入する農家が現れるなど、土壌問題を解決するための取組が進んでいます。



サブソイラー

次世代を担う新規就農者の紹介

もともとは会社勤めでしたが、家族で過ごす時間を大切にしたいという気持ちで強く、思い切って農業の世界に飛び込まれました。実際に農業を始めて良かったことを聞くと、「間引きしたものを食べるとおいしかったり、収穫直前のわくわく感だったり、ささやかな感動があります」という答えが返ってきました。今は経営目標の達成に向け、



大庭久宜さん

大庭久宜さん(39歳)は、平成27年10月に就農しました。レタス、ズッキーニ、ナス、モロヘイヤなどを栽培し、スーパー等で販売されています。

家族で過ごす時間を大切に

亀岡市 大庭久宜さん

おおは ひさよし

排水や雑草対策に試行錯誤しながら取り組む姿に力強さを感じます。将来的には、規模拡大というよりは「自分の経営を安定させた上で、地域の他の生産者たちと安定的に出荷できる仕組みをつくっていききたい」と夢を語る大庭さん。さらなる経営発展が期待されます。



露地野菜の追肥作業



就農の動機は東日本大震災の発生を受けて、自分や大切な人が食に困らない生活をしたいと思うようになったからです。大西修指導者から研修を受け「水稻、ホウレンソウ、黒大豆等、複数の品目で時間や労力の配分が大変でした」と塩田さん。せっかく育てた農作物を鹿に食べられてしまったこともあり、



塩田真弘さん

塩田真弘さん(44歳)は、平成28年9月に1年間の担い手養成実践農場研修を終えて、就農されました。現在は、水稻、ホウレンソウを栽培し、道の駅などに出荷されています。

質美の魅力を日々実感

京丹波町質美 塩田真弘さん

しおた まさひろ

農業の難しさを感じたと言います。それでも、「質美は自然が多くて景色がきれい。集落の方が何かと気がかけてくれるので大変ありがたいことです」と日々質美の魅力を感じておられるようです。

地域のイベントにはできるだけ参加するよう心掛け、集落の一員として生活するうちに、地域のために自分に何ができるか考えるようになったといいます。将来は豆類と米の生産を拡大していきたいと考えておられ、地域の担い手としての活躍が期待されています。



黒大豆枝豆の収穫作業

「黒大豆塾」の取組



今回講師を勤めた職員3人

丹波黒大豆は全国的なブランド力を誇っていますが、生産者の高齢化等により栽培面積が減少し、昨年度は平成10年の約5割近くに減少しました。一方、実需者から増産の要望は高く、普及センターでは、黒大豆の生産拡大のため、これまでペテラン農家が蓄積してきた栽培技術の伝承を目的に、J A 京都と共催

で、園部、日吉、丹波、和知の4地域で「黒大豆塾」を開講しました。

普及センターでは、年間のカリキュラムを組んで黒大豆の生育状況に応じた講座を実施しています。第3回までの講座で、延べ282人、実人数で199人の出席がありました。(2月に第4回(最終回)を開催予定)

「黒大豆塾」では、は種、育苗、定植、中耕・培土、水管理、施肥、病害虫防除等の基本技術に加え、根粒菌(マメ科植物の根に共生し、大気中の窒素を固定して植物に供給する働きをする直径3mmほどの粒をつくる細菌)をクローズアップした講義や、現地ほ場での摘心機による摘心作業の実演も行いました。

特に摘心技術は、梅雨入り前には種しても倒伏の心配が無く、開花が揃うことにより莢付きが安定する効果があり、面積も増やすことができます。来年度から新たに黒大豆栽培を始めようとお考えの方、是非、当センターへご連絡ください。



摘心機による黒大豆の摘心作業



根には根粒菌の粒がたくさん!

京都府では有機農業の推進に関する法律に基づき、平成22年3月に「京都府人と環境にやさしい農業推進プラン」を策定しました。南丹普及センターにおいては、平成23年度に有機農業に取り組み人同志が連絡を取りあえるよう名簿作りから始め、互見会や交流会を開催しました。

平成24年度から27年度にかけては「京都丹波有機農業講座」として、葉菜類コース、水稲・大豆コース、マーケティングコース



現地研修会（水稲）

有機農業の取組を支援



有機農業サロン（昼食懇談会）

ス、果菜類コース、現地研修会等、栽培技術を中心とする合わせて19回の講座を実施してきました。平成28年度は「京都丹波有機農業サロン」と名を変え、気軽に情報交換ができる場として、基礎講座や昼食懇談会、視察研修などを実施しています。これから有機農業を始めたい、あるいは有機農業をしている人と情報交換をしたいという方は、お気軽に普及センターまでご連絡ください。

水生生物に生息場所を提供するために、冬場の田んぼに水を張る（冬期湛水）など、自然環境保全にも配慮したエコファーマーの取組を行うとともに、「エコふあーまーファンくらぶ京都」の活動に協力し、消費者の理解促進に努めていることが評価されました。



冬期湛水時に生き物調査



普及センター職員を講師に研修会

きたかなげ 北金岐環境保全会（亀岡市）

京都府農地・水・環境保全向上対策協議会長賞

28年度 優良組織表彰 環境保全型農業部門

全国的な和牛の血統評価情報を取り入れ、遺伝的に優れた繁殖母牛群を構成する他、受精卵移植技術を活用した和牛子牛増産の先駆けとして、高い育成技術と併せ、京都府産高級和牛肉増産を支えてこられました。

「肉用牛繁殖」 俣野忠雄（亀岡市）



「農の匠」（敬称略）

京都府では農山漁村地域に伝わる伝統的で優れた生産・生活に関わる登録技能の中でも、特に優秀で希少な技能保持者を「匠」として知事が認定しています。

28年度 磨き上げた知恵と技 京都府農山漁村伝承優秀技能認定者

退任・認定された農業士の皆さん（敬称略）

新任			退任		
	青年農業士	中西文彦		女性農業士	森脇房子
	女性農業士	黒田真紀		吉田和雄	吉田和雄
	女性農業士	西田芳恵		松崎忠嗣	松崎忠嗣
		新田尚志		田村隆弘	田村隆弘
	指導農業士	菱田光紀		指導農業士	田村隆弘

よろしくお願ひします

お世話になりました

Topics

話題の技術 アザミウマを寄せ付けない赤いネット

アザミウマ類は幅広い作物を加害し、ウイルス病も媒介する、やっかいな害虫です。近年、薬剤抵抗性の発達により、農業以外の防除法が注目され、その一つが赤い防虫ネットです。

従来の防虫ネットでは、極小目合い0.4mmでもアザミウマ類の防除は難しく、目合いが小さいと通気性が悪くて高温になる欠点がありました。赤いネットはアザミウマ類が赤色の波長を忌避する特性を利用し、目合いが0.6mmでも十分な防除効果を発揮します。

ただし、コナジラミ類には効果がありません。主にアザミウマ類が問題になる作物（キュウリ、キク、ネギなど）には有効です。



ハウスでの使用例

Topics

「援農隊」が農家をサポート！

普及センターでは、人手を必要とする農家と農作業ボランティア（「援農隊」）をマッチングさせる取組（援農マッチングシステム支援事業）を進めています。7、8月に日吉で伏見甘長とうがらし、ブラックベリー等の収穫等延べ11名の援農隊が農作業を支援しました。支援を受けた農家からは「援農隊があると、個人農家の農作業を頼みやすい」と感想が寄せられています。現在、美山、亀岡から製茶作業、ネギ・エビイモの収穫に対する援農隊派遣依頼の申込みが寄せられています。取り組んでみたい方は普及センターへご連絡ください。



援農隊活動の様子

平成29年度 京都丹波就農サポート講座

受講生募集中!!

- 対象 将来、京都丹波地域の農業の担い手として基礎技術習得が必要な方。定員は20名程度。
- 日時 平成29年4月～10月 原則、平日午後1時30分～5時
- 会場 京都府園部総合庁舎（南丹市園部町小山東町藤ノ木21）他
- 講座内容（予定） ☆土壌肥料、病害虫防除、露地野菜、施設野菜、豆類等の基礎技術 ☆先進農家の経営視察研修
- 受講料 無料（実費負担をお願いすることがあります）
- 申込方法 申込書に記入の上、持参・郵送・FAX・電子メールで申し込み。書類選考の上、3月下旬に受講生を決定。詳しい募集要領・申込書の請求は普及センターまで（普及センターのホームページにも掲載）
- 締切 平成29年3月21日（火）必着



地元の小麦と小豆で 京ブランドのパン作り

亀岡市河原林町の農事組合法人河原林では「きょうと農商工連携応援ファンド支援事業」によって府内製パン及び製粉業者と連携し、同法人が生産した小麦と京都大納言小豆を使った京ブランドのパン作りを進めています。昨年8月にはこの小麦で作ったパンの試食を行うとともに、小麦のタンパク質含有率など成分分析結果を基に、おいしいパン作りのために今後の栽培方法について確認しました。



また昨年10月10日に亀岡市農業公園で行われた「アグリフェスタ2016」では、小麦の入った2種類のパンを販売し、売れ行きが好評であったことから、本格的な商品開発・販売に向けて確かな手応えを感じました。



実需者との打ち合わせ

NEW Face

はねさなえ
羽根沙苗 技師



昨年4月に農業技師として採用されました。農作物の生産現場にふれることができ、新鮮な毎日を通して頼りになる普及指導員を目指して、頑張っていきたいと思っております。

京の農林女子ネットワーク会議

～まだまだメンバー大募集！～



京都府では、農林業に携わる若い女性視点での悩みの改善や交流を目的として、府内では「京の農林女子ネットワーク」づくりを推進しています。悩みを改善するため、企業と連携して便利機能商品やオシャレな作業着を開発する取組を行っています。

交流会では、初顔合わせから良い雰囲気で盛り上がりました。元気になれる楽しい会ですので、まだ参加されていない農林女子の皆さま、是非普及センターへご連絡ください。

農家の一言から

担い手づくり担当 内藤松一 主査ないとうしゅういち

水稲のあぜ道農談会に行くのとベテラン農家からこんなことをよく言われる。「農業は毎年1年生や」。どんな意味があるのか？

工業製品と違って、農業はその年ごとに違う気象条件に合った管理技術が求められる。それが出来ない正常に農産物が穫れない。さらには、台風などが襲来し被害を受けると、高度な技術を持つていても対応しきれない場合もある。

いろいろな悪条件に対応出来る判断能力と栽培技術が必要である。「毎年1年生」という意味は、常に作物の生育をよく観察し、適切な判断が出来るよう毎年の学習を積み重ねるという意味があるのでは。もうすぐ卒業を迎える普及指導員からの一言でした。



ヒメイワダレソウ

編集・発行

京都府南丹広域振興局
農林商工部
南丹農業改良普及センター
京都府南丹市園部町小山東町藤ノ木21
TEL 0771-62-0665
FAX 0771-63-1864
ホームページ
<http://www.pref.kyoto.jp/nantan/no-nokai/>
E-mail
nanshin-no-nantan-nokai@pref.kyoto.lg.jp

【再生紙を使用しています】